

車椅子の少女が命を懸けた物語に教えられたこと

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

はじめに

今回は、高山かおり先生に執筆していただいた。

彼女が紹介してくださった「セーラームーン」、実はまだ、その漫画を読んだことがない。しかし、それが歴史に名を残した秀作であると、聞いたことはある。漫画のみならず、アニメ、映画、ゲーム、舞台、さまざまな領域で幅広く人気を博した作品として、広く高名であろう。

そういえば、良く通う市立図書館に、「セーラームーン」の漫画が全巻揃っていた。今度借りてみようと思う。もしかしたら、この年になってそのような蔵書を借りるとなると、その姿をみた司書さんは、私を変な目で見えてくるかもしれない。しかし大丈夫。私には娘がいる。娘のために借りるんだよ、という大義名分を胸に、威風堂々と借りてみることにしよう。

もっとも、私の娘は、「セーラームーン」に親しむことがなかった。

その一方、娘はかつて「プリキュア」が大好きだったから、娘が幼い頃、何度か一緒にそれを楽しむことが少なくなかった。よって私は、未だに、「スイートプリキュア」の主題歌を歌えるほどである。「ラ♪ラ♪ラ♪スイートプリキュア♪」は、今聞いても、歌っても、とても元気になれる曲である。

子どもからの影響

娘から「プリキュア」を教わった一方、息子からは「仮面ライダー鎧武」を教わった。

幼き頃、「仮面ライダー（スカイライダー）」や「仮面ライダースーパー1」に夢中になった私は、TVで「鎧武」をみて、仮面ライダーシリーズの進化を間に当たりにした。さまざまな演出に感動すら覚えた。しばらくは息子とこれを楽しもうとすら思ったが、…残念ながら息子は「鎧武」以降、仮面ライダーを卒業して、野球に夢中になった。

学童野球、そしてその後は中学硬式野球に移行した息子に付き添って、やれ遠征だなんだ

と、親としていろいろとお手伝いする役割が増えていった。同時に、野球部出身ではない私は、あまり野球に詳しくないことを自覚し、おのずと、野球に関する本を読むようになっていった。

読者はご存知であろうか？野球にはいくつのルールがあるのかということ。

息子がお世話になっている硬式野球チームのある保護者は、次のようにいていた。

「野球のルールの基本は、1700 ですよ。でも、リーグの違いなどによって、更に増えたりするんですよ。ひたすら勉強ですよ」と。

せ？

せん？

せんななひやく？

(;▽;)



私はそれを聞いて驚愕した。とても覚えられる数ではない。

野球経験者ってすごい…。

ちなみに私は、陸上部、サッカー部、空手部出身者である。陸上や空手のルールは、競技によって異なるが、さほど複雑ではない。サッカーのルールの基本は、17 種類である。

野球と桁が2 つも違う…。

生まれて初めて野球の本に触れる

以降、息子の付き添いのために、野球の本を読むようになった。ただ、公式ルールブックはつまらないから、なるべく読みやすい本から手を取るようになった。

まず、バッティングの基本、守備の基本、走塁の基本などの専門書を取りあえず斜め読みした。野球を生業とする方々の著書にも手を出し、やがて、清原和博、桑田真澄、新庄剛志、野村克也、落合博満などの、元プロ野球選手らの著書を手に取るようになった。

以下、読了したそれらの本の一部を示す。

高橋 秀実	「弱くても勝てます」開成高校野球部のセオリー
小谷野栄一	自分らしく パニック障害と共に生きる
中村 計	世の中への扉 甲子園がくれた命
島沢 優子	スポーツ毒親 暴力・性暴力になぜわが子を差し出すのか
早見 和真	あの夏の正解
桑田 真澄	心の野球 超効率的努力のススメ
三井 康浩	ザ・スコアラー
年中 夢球	球伝
朝日新聞スポーツ部	高校野球 名勝の流儀 世界一の日本野球はこうして作られた

小塩 靖崇	10代を支えるスポーツメンタルケアのはじめ方 高校野球 名将の流儀 世界一の日本野球はこうして作られた
新庄 剛志	わいたこら。 人生を超ポジティブに生きる僕の方法 スリルライフ 天才ではないが、天然でもない
清原 和博	清原和博 告白 魂問答 反骨心
落合 博之	采配 不敗人生
野村 克也	一流非難 巨人軍論 組織とは、人間とは、伝統とは ああ、監督 名将、奇将、珍将 エースの品格 一流と二流の違いとは 野村セオリー 絆 野村の革命 野村ノート リーダーとして覚えておいてほしいこと 上達の技法 「野村再生工場を語る」 よみがえるノムラの金言 女房はドーベルマン 人生に打ち勝つ野村のボヤキ 遺言 野村克也が最後の1年に語ったこと 野村再生工場 叱り方、褒め方、教え方 プロ野球怪物伝 大谷翔平、田中翔大から王・長嶋ら昭和の名選手まで 私が野球から学んだ人生で最も大切な101のこと 人生を勝利に導く金言 弱者が勝者になるために 野村克也野球論集成

…などなど。

どうせなら彼らの著書すべてを読了してしまえ、と調子にのつたが、よくよく調べてみると、数百冊以上あることを知り、白旗をあげた。野村克也一人だけで、350冊以上の著書があるらしい。凄まじい。なんという著書数だろう。

アスリートでありながら、著述家でもある彼らに感服した。とにかく、野球関連の本の多さに、これまた驚愕してしまったのであった。

私の心に刻まれた野球漫画

息子のため(?)に野球関連本を読んでいるうちに、ふと思い出した。少年時代に私は、それなりに野球漫画に親しんでいたことを。

あだち充の「タッチ」、ちばあきおの「キャプテン」や「プレイボール」。「MAJOR」や「グラゼニ」、「おおきく振りかぶって」、「ダイヤのA」などが、次々と頭に浮かんでくる。

そしてその中で、今回特にご紹介したいのは、小山ゆうの「チェンジ」である。

小山ゆうといえば、「がんばれ元気」、「あずみ」、「お〜い! 竜馬」などが代表作で、それぞれアニメ化や映画化などがされている。しかし「チェンジ」は間違えなく、隠れた名作である。少年漫画の金字塔に加えてもおかしくはない。

さて、この「チェンジ」は、車椅子の少女・早(さき)が、自分の命と引き換えに49日間の時間を早に与えた新米の死神の奇跡により、高校野球の甲子園を目指す物語である。

この作品、確か、2巻か3巻という短さで完結してしまったが、とても感動したことを覚えている。ネタバレを避けるため、ストーリーについて細かく触れることはしないが、とにかく泣ける作品であった。周囲の友人に、しきりに一読をすすめたことを覚えている。ある友人の一人は「泣け過ぎて、読むのが辛い」とすら語っていた。「これはいつか必ず、映画化するに違いない」と私は確信してきたが、私の知る範囲で、未だにそのような動きはない。おかしい。実におかしい。アニメでも実写でも、絶対世界的にヒットすると思う。

実は、「チェンジ」は青春野球漫画であると同時に、友情、愛情、信頼、命、人生とは何かを訴えかける、哲学的漫画でもあったのだ。ただ「野球が好き」とか「野球で勝ちたい」という枠にとらわれず、限られた人生でどのように生きることが大切なかを問うてくるような作品だったのである。

読者の皆様におかれても、ぜひこの作品をご一読いただき、私と一緒に考えていただきたい。

私たちの人生は有限である。

いつか必ず訪れる最後の日に向かって、今日も生きているのである。その事実を踏まえて、私たちは今日、どんな過ごし方をするのであろうか。どんな過ごし方をすべきであらうか。

今日は、私たちの残りの人生の、最初の1日である。

二度とない、大切な1日である。そうであるならば、私たちは、その時間を有意義に、有効に、使っているのであろうか。

もしかしたら、無為に、無駄に、浪費しているかもしれない。

そんな時もあるかもしれない。

それが良いとか悪いとか、正解とか不正解であるかと、追求したいわけではない。

ただ、限りある、尊い人生の真っ只中にいる私たち自身は、時に、命や時間が永続的に続くわけではないということを忘れていないかもしれないということを、指摘するだけである。

少なくとも私は、時々それを忘れていく。

忘れるから、大切にすることや、努力することを怠る。

鈍感になるから、漫然と日々を過ごす。
そして、時々気づくのである。「勿体ない」と。

命を懸けるということ

時間を、命を、この上なく大切に生きる、というのは、言うほど簡単ではないと思う。

でも、その姿勢というか意欲というか志のようなものをちゃんと持っていないと、やっぱり勿体ないと思う。

この発想って、人を支える職業者は皆、多かれ少なかれ、お持ちになっていたりと、お感じになっていることではないだろうか。

報われる、とか、儲かるとか、そういった目的から遠ざかり、ただ、自分の「命」を「使う」ということを大切にするということ。つまり、「使命」をもって生きるからこそ、人は、他者を、心から支えられるのではないだろうか。

その意味で、対人援助というのは、職業としての在り方の前に、「生き方」としての哲学が問われることが多々あると思う。

さて、読者はどうお考えになるだろうか。

機会があれば、ご示唆頂きたい。

—つづく—